

# ヒンディー語の諸方言地域における昔話採録の記録\*

拓殖大学名誉教授 坂田 貞二

## [0] はじめに：ヒンディー語とその方言、私の自己紹介

ヒンディー語はインド憲法343条に定められたインドの公用語であり、中国語と英語につぐ約四億人の話者を持つ。

ヒンディー語にはいくつもの方言があり、主なものだけでも西から東にマールワリー、カリー・ポーリー、ブラジュ、アワディー、ボージュプリーなどが話されている。

・ヒンディー語は、西隣りのパンジャービー語や東隣りのベンガル語と並んで、インド・アールヤ語系統に属する。インドの他の言語系統では、南のタミル語を含むドラヴィダ語系統やチベット・ビルマ系統などがある。

・イギリス統治時代から盛んに使われている英語は、現代のインドで「補助公用語」である。

私は1959年4月から東京外国語大学でヒンディー語を専攻し、1963年に卒業すると同時にインドのパナーラス・ヒンドゥー大学に留学して、ヒンディー語とその文学を学んだ。1965年に帰国してから2019年まで、大学や各種学校でヒンディー語とヒンディー文学を講じてきた。

## [I] 昔話を聞くために家に泊めてもらい、語ってくれる人を探すために私がしたこと

昔話採録は、多くの場合に下記のように行った：

→インドのヒンディー語学者に、採録先の紹介を依頼する。

→その人の紹介で、地方の有力者や大地主に会う。

→有力者・大地主とともにその支配下の地主に会う（日本人の友人に紹介された場合もある）。

→農村では昼間、日に干してあるベッドに座って人々が談笑するのが一般的だが、「貴方は遠来の客だから」と村の人から私が枕を置く上座を薦められても、「突然に訪ねてきた外国人だから」といって足の方の下座に座るようにする。そうすると「この日本人は村のしきたりを知っている」と思って安心して泊めてくれ、語り手も自然に決まる。

これには、大学で学んだ次のことが役立っているようだ。

・金田一 春彦教授から「日本方言学」を学び、田舎の人と仲よくする方法を教わった。

・二年のときには土井 久弥教授の翻訳「牛供養」（ブレイムチャンド作の長編小説、〈世界文学体系4巻〉『インド集』筑摩書房、1959年刊に蔵）を熟読した。そこにはベッドの座の上

---

\* 宮城学院女子大学 キリスト教文化研究所 2020年11月19日(木)13:30からの研究会 坂田発表資料

下のことが採りあげられていた。なお二年のときにはプレームチャンドの長編小説も原文で何編か読み、話し言葉を学んだ。

→昔話採録のまえに、グリヤソン（編）『インド言語調査』（G.A. Grierson, *Linguistic Survey of India*, Vol. IX Part 1）ほかで、採録地の話し言葉（方言）の概要を知っておく。

・私は1963年から1965年までの留学中に、学生寮にいたヒンディー語の諸方言地域出身者から、彼らの方言の聞きとりをした。

→地方の地主の家に泊めてもらっているとき、村の下層民を訪ねる場合はその地主の許しを得る。

→お礼。泊めてもらうことへの代価は受けてくれないので、それに代わる日本からの土産やその家のご先祖への供養代を現地のお金で差しだす。

お世話になった家族の写真を撮り（携帯電話が普及する1990年くらいまでは写真が貴重だった）、帰国後すぐに送る。また報告書・論文・翻訳書は、次回インドに行くときに直接に手渡しする。

## 〔Ⅱ〕 私の昔話採録記録

私は1981年4月から1982年3月までの拓殖大学の研究休暇期間に、ヒンディー語の諸方言地域に滞在して、各地の昔話を採録できた。なお私による昔話採録の録音は、私と東京外国語大学が保管している。

(1) 共通ヒンディー語\*の基盤をなすカーリー・ボーリー方言で。

⇒単独訳：『北インドの昔語り』平河出版社、1981年。

共訳：『インドの笑話』（田中於菟弥氏と共訳）春秋社、1983年。

共訳：『インドの昔話 上、下』（坂田＝北中央のヒンディー語、前田式子＝極北のジャンム一語、辛島 昇＝南のタミル語、西岡直樹＝西のベンガル語を分担執筆）春秋社、1984年。

なおサトワイー村にはじめて泊めてもらったのは、1964年に方言調査に入った家である。その家に六週間くらいお世話になったが、そのときはヒンディー語学者の紹介→メーラト市の大地主の紹介→その大地主からの紹介で村の地主に会うという手順だった。

(2) ヒンディー語の東端のポージュプリー方言で。

拓大の研究休暇期間中の1981年夏と冬の合計六週間くらい、北インドの古都バナーラス（正式名はワラーナシー）の南80キロほどのジャラルプル・マイダーン村で。この村の家にはバナーラス・ヒンドゥー大学の日本人留学生の橋本 泰元さん（現在 東洋大学教授）の紹介で、大学の級友の実家に泊めてもらった。

⇒単独訳：『インドのむかし話一天にのぼるペールの木ほか』〈大人と子供のための世界のむかし話 ②〉偕成社、1989年。

---

\* 共通ヒンディー語は、カーリー・ボーリー方言を基盤として成りたち、ヒンディー語の諸方言地帯の小学校や中学校で教えられ、インドの放送局でも「ヒンディー語」とされるいわば標準ヒンディー語。

(3) ヒンディー語のアワディー方言で。

1981年の冬に、ウッタル・プラデーシュ州の州都ラクナウ近くの村で四週間くらい。ラクナウに実家がある学者からその大地主に紹介され、村の地主の家を紹介される。

⇒未刊。

(4) 長いあいだ文学用語だったヒンディー語のブラジュ方言で。

1981年の秋に三週間くらい首都ニュー・デリーの南160キロくらいのヴリンダーヴァン市から10キロくらいの北の村で。ヴリンダーヴァンの寺院の僧のご長男の紹介で、村の地主の家に泊まる。

⇒未刊。

(5) 共通ヒンディー語で。

1981年の秋に三日間、首都ニュー・デリーの南170キロくらいのマトゥラー市に住む弁護士一家から。その家はコルカタ在住の夫人の実家で、その夫人の紹介で採録できた。

⇒原文・単独訳注：『ヒンディー語民話集』大学書林 1999年。これは共通ヒンディーの原文を載せているので、初等文法を終えた人の教材として最適。

(6) マールワリー方言で。

1999年の春の一週間くらい、北インドの西端ラージャスターン州のファローディー村で（客を歓迎するために阿片を供するのが村の慣わし）。

⇒一部は論文で紹介、本としては未刊。

(7) ブラジュ方言で。

2015年の夏一週間くらい、アークラー近くの村で。村長と馬引きが聖地巡礼に行って、村長が馬引きの疑問に答えるという話を昔話集で読み、坂田がその村長と馬引の子孫に会いに行って、話を聞いた。

⇒一部は論文で紹介。

### [Ⅲ] 上記のほかの参考文献

- ・昔話や民話：坂田 貞二（編）『インド・ネパール・スリランカの民話』（南アジアの8名の共訳）みくに出版、1998年。＝ジャンムー、ネパール、ヒンドスターン、ベンガル、タミル、スリランカ、マハーラーシュトラ、パンジャブの民話を、南アジアの言語の専門家が厳選・邦訳したもの。
- ・南アジア全般：『新版 南アジアを知る事典』（辛島 昇、坂田 貞二、前田 専学ら10名が監修）平凡社、2012年。＝「挨拶」や「民謡（北インド）」の項などを八木 祐子が、「ヒンディー文学」の項などを坂田が執筆。
- ・インドの近現代文学：坂田 貞二（編）・『インドの文学Ⅱ』（週刊朝日百科 世界の文学 116号）2001.10.14。 (以上)